2015.9.20　年間第２５主日

一人の子供を受け入れる者

マルコによる福音　9:30-37

（そのとき、イエスと弟子たちは）ガリラヤを通って行った。しかし、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。それは弟子たちに、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」と言っておられたからである。弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった。一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

説教

誰だって「人よりも先になりたい、上になりたい、偉くなりたい」という思いはあります。これは学校教育の目的のひとつでもあり、いまの社会全体の風潮です。否定する人もいるかもしれませんが、なによりの証拠がテストで順番を決め、職場、会社では肩書きで順列を決めています。「上になりたい」この思いは多くの人の人生の目標になっています。なかには自分は違う、関係ないとおもう人もいるかもしれません。でも、自身を省みてあの人だけには負けたくない、自分はこうだったけれど自分の子どもにだけはこんな想いをさせたくない、という気持ちはこれっぽっちもないでしょうか、なかったでしょうか？

イエスはこのような人の思いを全面的に否定します。
「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

マルコが描くイエスは理屈・説明がありません。イエスはこういった、ああいうことをした、マルコはただただそれを簡潔に記録するだけです。
この大否定のあと、イエスの説明は子どもの手をとって弟子たちの真ん中に立たせ、抱いて「この子を受け入れなさい」といったとあります。
これでは弟子たちはちんぷんかんぷんでしょう。それはわたしも同じです。イエスが何いっているのか、なんでいきなり子どもがでてくるのかわかりません。

　きょうの福音は受難予告（マルコでは二回目）があり、弟子たちはその予告を怖がっていたとあります。そしてイエスの受難予告の後か前かはわかりませんが、また予告に直接関係があるのかどうかはわかりませんが、弟子たちは誰が一番偉いか議論していたとあります。内容については、詳しくは書いてないのですが、誰が弟子の中で一番出世するかという下世話なことを言い争っていたのでしょう。
その様子にイエスはいつものように単純な解答を示します。そしてお約束のようにちょっとはぐらかしが入っています。イエスは子どもを抱き上げて、この子を受け入れよ、という解答です。
一見へんてこな答えに思えますが、考えてみればこれはイエスにとって当たり前なことです。イエスは人間をすべての人を神の子と見ました。父である神はすべての人をわが子として愛し、だからこそ、特別に小さい者にいつくしみを注がれる方です。このイエスの見方からすれば、誰が偉いとか、誰が金持ちだとかは全然その人の価値とはなりません。イエスの眼差しとはそう

いうものです。だからこそ、わたしたちはイエスの眼差しにひかれ、あこがれるのです。
マルコが「子どもを受け入れること」と「子どものようになること」を区別していないとしたら、イエスの言動がわかります。つまり、おれが偉いとか、あいつはダメだとか、つべこべいっていないで、まずは自分が子どものようになる＝小さい者であることを受け入れる＝子どもを受け入れよ、となります。

マルコ 9:37
「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」
マタイ 18:3-5（平行箇所）
「はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」
ルカ 9:48（平行箇所）
「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である。」
　子どもを受け入れるというイエスの教えをマルコ・マタイ・ルカの福音書の平行箇所を並べてみました。
子どもを受け入れる＝わたしを受け入れる＝わたしをお遣わしになった方（神）を受け入れるという言い方は共通しています。マルコにはなく、マタイ、ルカにあるのは受け入れた者は偉いという、いわば評価です。偉いとほめられたければ受け入れなさい、条件というか、奨め（悪く言えば脅しのようなもの）が書いてあります。まあ、だれが偉いか、出世するかと議論しあってい

た弟子たちですから、偉いと褒められたかったら「小さき者を受け入れよ」とガツンといったほうが身に染みるのかもしれません。

　信ずるということは、やはり幼子のように与えられるものを祝福する、そのまんまを受ける、ということです。笑ったり泣いたり、手足をバタバタさせたりする、イエスを信ずるということはそういうことと自然に響き合うようなことがなければ、それは信ずるとは言えません。何か信仰ということに凝り固まったようなると、（信仰が肩凝りのようにコリコリになると）これは全然イエスの言う、信ではありません。信（信仰）というのは本当に安らかなことが、自然というか、無理がないということがそこになければ、信（信仰）ではないでしょう。本当に人間が生きるという人間のしあわせというものは、本当に満ち足りるということはそこにしかありません。これが抜ければ、欠ける、ということになれば、ほかにどんないいことがあっても、そのいいことがかえって不幸のもとになります。

「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

このイエスのみことばを受け入れて「仕える者」となる、立派なことです。でもきょうの福音をよく聞いてください。「子どもを受け入れよ」とも書いてあります。どうぞ仕える者という、いうなれば「謙遜」「へりくだり」を身につけようとするときに、幼子を受け入れるということに気を配ってください。「仕える者」という奨めに凝り懲りになったクリスチャンはただただ迷惑な人です。まずは子どもを受け入れる、自らを低いものと、自分自身がちっぽけな人間であること、無力であることを受け入れる、それが肝心だとみことばは語っています。